

モネ

ポーラ美術館 × 国立西洋美術館

風景をみる眼

19世紀フランス風景画の革新



モネの眼を、あなたの眼で。

モネ

国立西洋美術館 × ポーラ美術館

風景をみる眼

19世紀フランス風景画の革新



モネの眼を、あなたの眼で。



⑪ エミール・ガレ《海藻と海馬文花器》1905年頃 ガラス 高10.8×径10.5cm ポーラ美術館
⑫ クロード・モネ《ルーアン大聖堂》1892年 油彩、カンヴァス 100.4×65.4cm ポーラ美術館
⑬ クロード・モネ《ウォータールー橋、ロンドン》1902年 油彩、カンヴァス 65.7×100.5cm 国立西洋美術館 松方コレクション

カンヴァスの上に作りあげていった、水の小宇宙とでもいうべき独自の絵画空間に焦点をあてます。画面は、光と影が戯れる水面から水草が揺らめく水中へ重層的に広がる水の空間に覆われていき、絵を前にした鑑賞者は、画家の眼とともに、壁に立ち上がった水の深みを見下ろすことになるでしょう。またこのセクションでは、モネの絵画空間に対し、層を重ねつつ、下地を彫り出して幻想的な文様を浮かび上がらせる被せガラスなどの技法を駆使した、ガレのガラス工芸の世界との比較も試みます。(⑪)

V. 石と水の幻影

晩年のモネは、ロンドン、ルーアン、ヴェネツィアを舞台に、光をはらんだ霧のヴェールの向こうで、石の建造物が周囲と一体化して作り出す幻想的な風景を描き出しています。現代生活を独自の枠組みで切り取る初期の作品とは対照的に、同じように都市を眺めつつも目に見える風景の向こう側に視線を投げかけるモネ。彼の「眼」の軌跡をたどる本展覧会は、これまでの各セクションとも呼応するこのセクションによって締めくくられます。(⑫⑬)

作品解説

■モネ《睡蓮》⑩——1903～1908年に描かれたモネの「睡蓮」の第2連作では、池の周囲の植物や岸辺は姿を消し、画面は水面の表現で満たされていきます。朝の眺めを描いた本作では、白とバラ色の睡蓮が浮かび、水草が揺らめく水面が繊細な筆遣いで描かれています。

■ガレ《海藻と海馬文花器》⑪——深海の奥底に潜む営みに人の心の深淵を重ねたボードレールの詩句が刻まれた本作品では、被せガラスとエッチングの技法によって、海中に揺らめく海藻やタツノオトシゴを浮かびあがらせています。

■モネ《ルーアン大聖堂》⑫——太陽の光を浴びて幻想的に輝き、またその光の移ろいに従って表情を変えるルーアンの大聖堂を、モネは30点におよぶ連作に描いています。形を臙げに浮かびあがらせながら「包み込むもの」というモネが目指した光のありようを表現しています。

■モネ《ウォータールー橋、ロンドン》⑬——モネは1899年から3年続けてロンドンに旅行し、都市風景を描いています。テムズ河に帆船が航行し、橋の上を人や馬車が行き交う産業都市のロンドンを、モネは霧に包まれた幻想的な光景に仕立てています。

※本展覧会では、作品保護、展示計画などの理由から、ポーラ美術館、あるいは国立西洋美術館のみの出品作品があります。

■ポーラ美術館のみの展示——モネ《睡蓮の池》、ゴッホ《草むら》、シニャック《ブリシングン湾》(すべてポーラ美術館蔵)など

■国立西洋美術館のみの展示——モネ《睡蓮》、クールベ《波》、シニャック《サン＝トロペの港》(すべて国立西洋美術館蔵)、ルノワール《ムール貝採り》《エッソワの風景、早朝》(いずれもポーラ美術館蔵)など

Press Release

モネ 風景をみる眼 19世紀フランス風景画の革新

Monet, An Eye for Landscapes:
Innovation in 19th Century French Landscape Paintings

展覧会概要

第1会場

ポーラ美術館×国立西洋美術館

モネ、風景をみる眼—19世紀フランス風景画の革新

会場・会期：ポーラ美術館 2013年7月13日(土)～11月24日(日)

住所：神奈川県足柄下郡箱根町仙石原小塚山1285

主催：公益財団法人ポーラ美術振興財団 ポーラ美術館、国立西洋美術館、TBS

出品点数：約100点

開館時間：午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

休館日：会期中無休

電話番号：0460-84-2111

URL：展覧会HP <http://www.tbs.co.jp/monet-ten/>

ポーラ美術館 <http://www.polamuseum.or.jp/>

入館料	大人	シニア割引(65歳以上)	大学・高校生	中学・小学生
個人	1,800円	1,600円	1,300円	700円
団体(15名以上)	1,500円	1,500円	1,100円	500円

※土曜日は小・中学生は無料。

第2会場

国立西洋美術館×ポーラ美術館

モネ、風景をみる眼—19世紀フランス風景画の革新

会場・会期：国立西洋美術館 2013年12月7日(土)～2014年3月9日(日)

住所：東京都台東区上野公園7番7号

主催：国立西洋美術館、公益財団法人ポーラ美術振興財団 ポーラ美術館、TBS

協力：公益財団法人西洋美術振興財団

出品点数：約100点

開館時間：午前9時30分～午後5時30分 ※金曜日は午後8時まで

(入館は閉館の30分前まで)

休館日：月曜日

(ただし、12月23日、1月13日は開館、翌火曜日は休館)、12月28日～1月1日

電話番号：ハローダイヤル 03-5777-8600

URL：展覧会HP <http://www.tbs.co.jp/monet-ten/>

国立西洋美術館 <http://www.nmwa.go.jp/>

入館料	一般	大学生	高校生
前売	1,200円	1,000円	600円
当日	1,400円	1,200円	700円
団体(20名以上)	1,200円	1,000円	600円

※中学生以下は無料。※前売券は2013年9月6日(金)～2013年12月6日(金)まで販売。

※当日券は12月7日(土)から販売。

お問い合わせ

□ 第1会場に関するお問い合わせ：ポーラ美術館 広報事務局

(株)共同PR 増田、小椋、三井 〒104-8158 東京都中央区銀座7-2-22

TEL：03-3575-9823 FAX：03-3574-0316 E-MAIL s-masuda@kyodo-pr.co.jp

□ 第2会場に関するお問い合わせ：「モネ、風景をみる眼」展 広報事務局

(株)IMPRESSION 松井、安田 〒107-0062 東京都港区南青山2-18-20 南青山コンパウンド502

TEL：03-6312-4098 FAX：03-6862-8660 E-MAIL sr@mbr.nifty.com



©2013-Succession Pablo Picasso-SPDA(JAPAN)

- ⑤ クロード・モネ《陽を浴びるポプラ並木》1891年 油彩、カンヴァス 93.0×73.5cm 国立西洋美術館 松方コレクション
 ⑥ ビエール・ピュヴィ・ド・シャヴァンヌ《貧しき漁夫》油彩、カンヴァス 105.8×68.6cm 国立西洋美術館 松方コレクション
 ⑦ パブロ・ピカソ《海辺の母子像》1902年 油彩、カンヴァス 81.7×59.8cm ポーラ美術館

3) モネ《舟遊び》と《バラ色のボート》裏面

《舟遊び》と《バラ色のボート》は、モネの2番目の妻アリスの娘、シュザンヌとブランシュがモデルとなっています。1880年代後半、モネは「人物を風景のように描きたい」と語っているように、両作品で周囲の風景と人物を一体として表現しています。そして、日本の浮世絵の影響による、中心を外した構図と大胆なモチーフの切り取りによって水面を画面に大きく取り込み、《舟遊び》では、そこに映る人物の影や空や雲の反映をとらえ、《バラ色のボート》では、水面の動きとともに奥に揺らめく水草までもを、うねるような力強い筆致で描いています。

4) ピュヴィ・ド・シャヴァンヌ《貧しき漁夫》とピカソ《海辺の母子像》⑤ ⑥

印象派の画家たちが盛んに活動した1880年前後から1900年ごろにかけて伝統的なスタイルで抒情的な世界を描き、フランスで強い影響力を持っていたピュヴィ・ド・シャヴァンヌ。バルセロナで青春時代を送ったピカソもまた彼に惹かれていたことをうかがうことができる2点です。水辺にたたずむ内省的な人物の表現、舟の形と水面への反映など、多くの共通点が見られます。

4. 2館を訪ねて較べて見たい展覧会。

本展覧会は、同じ内容を2館で展示するのではなく、各館の特徴をそれぞれ打ち出した展覧会です。

ポーラ美術館でのみどころは「モネとガレ」「自然の中でみる印象派」の2つ。本展覧会では、他の作家との比較からモネの表現の独自性を分析することも企図のひとつにしていますが、当館ではエミール・ガレをはじめとするガラス工芸を特集展示し、ガラス工芸による風景表現をご紹介します。また2013年春に全長約600mの遊歩道を開放し、緑豊かな自然を楽しめるようになりました。陽光を求めて戸外に制作の場を移した印象派の画家たちのように、自然のなかで美術をお楽しみいただけます。

国立西洋美術館は、国内随一の西洋美術の研究資料センターを備え、収蔵品に関する調査研究や資料の蓄積に努めてきました。今回の展覧会では、モネとその作品をめぐる時代背景や文化的文脈のより広い理解につなげることを目指し、収蔵品のなかからカタログ外の絵画や版画作品も参考作品として展示に加えつつ、同時代の出版物等の参考資料もあわせて紹介します。多面的な展示を通じて、また新しい視点から本展覧会をご覧いただければ幸いです。

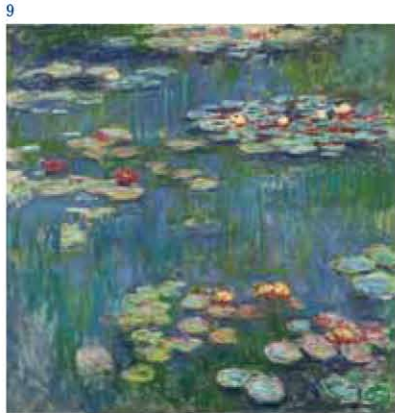
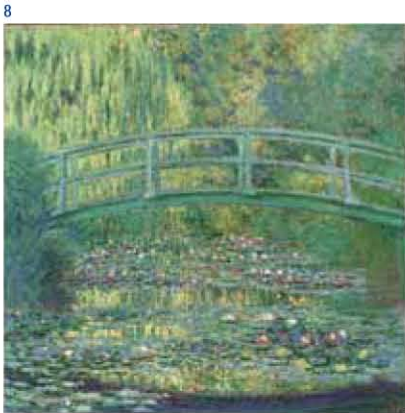
展覧会構成

Ⅰ. 現代風景のフレーミング

「私の眼はしだいに開かれた。自然を理解し、愛することを知ったのだ」。

(ブーダンとの出会いを回想するモネの言葉)

若き日のモネは、移ろいゆく光の下、変化と動きに満ちた同時代の眺めをさまざまな角



- ⑧ クロード・モネ《睡蓮の池》1899年 油彩、カンヴァス 88.6×91.9cm ポーラ美術館 ※ポーラ美術館のみの展示
 ⑨ クロード・モネ《睡蓮》1916年 油彩、カンヴァス 200.5×201.0cm 国立西洋美術館 松方コレクション ※国立西洋美術館のみの展示
 ⑩ クロード・モネ《睡蓮》1907年 油彩、カンヴァス 93.3×89.2cm ポーラ美術館

度から生き生きと切り取り、19世紀の日常的な光景に、近代都市の詩情ともいうべき、物語的背景に代わる新しい奥行を与えようとしています。同時代のテーマは印象派絵画の重要な要素であり、地平線を画面の下方におく伝統的な風景画の描き方も、浮世絵や写真の影響などによって多様化していきました。このセクションでは、モネがパルピゾン派の影響下に制作した初期作品や、パリの鉄道や駅、あるいは近郊の眺めなどを描いた1860年代から1870年代の絵画を集め、印象派の仲間に加え、コローやブーダン、マネ、セザンヌらの作品とあわせて展示します。(①②)

Ⅱ. 光のマティエール

1880年代、印象派の画家たちがそれぞれの試みに向かうなか、モネは新しい着想源を求めてノルマンディーやブルターニュの海岸に旅立ちます。そしてモネの絵画からは人物が消えていき、風景が彼のおもなテーマとなっていくのです。このセクションでは、モネの風景にみられる、光が戯れる対象の質感の表現に焦点をあて、クールベやピサロ、ゴーガン、ゴッホらの作品との比較を通じ、モネの視線がやがて光に照らされた対象のマティエール（質感）へ接近し、色面への意識を強めていく様子を考察します。(③④) また、スーラなど新印象派をはじめとした、モネが新たに切り拓いた光の表現を更に科学的に推し進めた画家たちの作品もあわせて展示し、風景画における光の探究の展開を概観します。

Ⅲ. 反映と反復

「(…モネは) 光があらわにした自然の諸相の表現へと向かったが、それはしだいに複雑で魔術的に、そして喚起力を増していった」。

(ギュスターヴ・ジェフロワの言葉、1922年)

光の表現の探求は、モネの眼を自然の外観のさらに奥へと誘います。しだいにモネは、連作形式やモチーフの反復、水面の反映像などを用いつつ、自然に内在する造形美や詩的な喚起力を、絵画空間における装飾的、象徴的要素として生かし始めます。(⑤) このセクションでは、ピュヴィ・ド・シャヴァンヌやルドン、ドニラ象徴主義者たちの作品とも比較しつつ、モネの風景表現のもう1つの側面を見ていきます。(⑥⑦) 絵を観る者に新しい風景のヴィジョンを示してくれるこうした試みは、やがて「睡蓮」の連作へと結びついていくことになります。

Ⅳ. 空間の深みへ

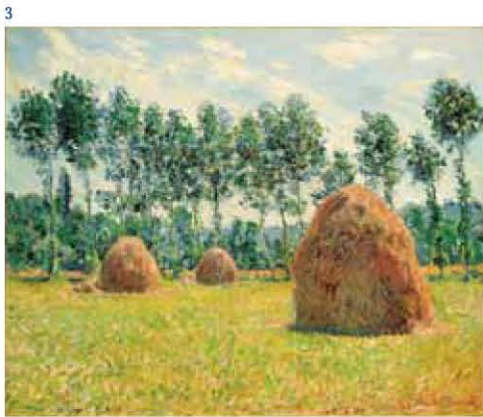
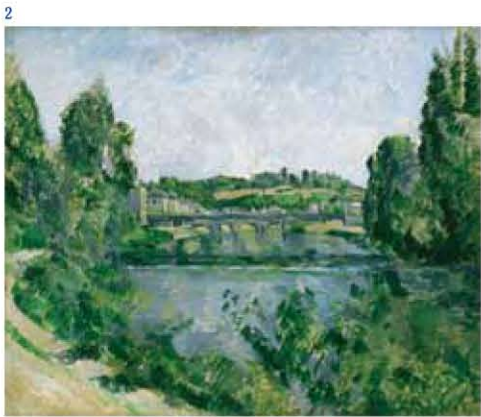
「もはや大地も空も境界もない。静謐で豊穡な水がカンヴァスのすべての領域を覆いつくしている」。(ロジェ・マルクスの言葉、1909年)

1883年にジヴェルニーに転居したモネは、セーヌ河とエプト川が合流する自然豊かな水辺のこの土地で後半生を過ごし、多くの着想源を見出していきます。特に1890年代から自宅の庭に整備し始めた睡蓮の池は、モネの代表作となる「睡蓮」の連作をめぐる数々の作品を生みます。(⑧⑨⑩) このセクションでは、水面の表現に魅せられたモネが



① クロード・モネ《グランド・ジャット島》1878年 油彩、カンヴァス 56.3×74.5cm ポーラ美術館

② ポール・セザンヌ《ポントワーズの橋と堰》1881年 油彩、カンヴァス 59.1×72.1cm 国立西洋美術館



③ クロード・モネ《ジヴェルニーの積みわら》1884年 油彩、カンヴァス 66.1×81.3cm ポーラ美術館

④ クロード・モネ《積みわら》19世紀 木炭、紙 23.3×29.2cm 国立西洋美術館



開催概要

「モネは眼にすぎない、しかし何と素晴らしき眼なのか」。

セザンヌのこの言葉は、生涯、戸外の光の表現を追求し続けた画家モネにもっともふさわしい賛辞ではないでしょうか。しかし彼の眼は、自然の風景から受け取る感覚的で瞬時的な印象を捉えていただけではありません。モネは後年、自らの記憶のなかで純化された、画家の内なるヴィジョンともいうべき、喚起力に満ちた風景を描いていきます。また、彼の絵画では、従来の遠近法とは異なる空間の表現が展開していくことがわかります。印象派を代表するこの画家については、光と色彩、筆触分割、あるいは近代都市の主題といった観点から、これまで何度も取り上げられてきましたが、国内有数のモネ・コレクションを誇る国立西洋美術館とポーラ美術館の共同企画である本展覧会では、絵画空間の構成という観点から、他の作家の作品との比較を通して、風景に注がれたモネの「眼」の軌跡をたどります。モネ作品36点を中心に、マネからピカソまで、2つの美術館のコレクションから選り出した同時代の主要作品の数々をあわせ、全5セクション、総数約100点の作品によって、モネがカンヴァスの上に作り上げていった絵画空間の独自性を明らかにします。

■ ポーラ美術館——化粧品会社のポーラ創業家2代目である鈴木常司(1930-2000)が、1950年代末より40年余をかけて収集したコレクションを展示・公開する目的で2002年、神奈川県・箱根に開館。西洋絵画、日本の洋画、日本画、東洋陶磁、日本の近現代陶磁、ガラス工芸、化粧品道具など幅広いコレクションの総数は、約9,500点におよぶ。その中核は、19世紀フランス印象派やエコール・ド・パリ、ピカソらの20世紀絵画を中心とした西洋絵画400点である。モネの絵画19点を収蔵、日本国内では最大の収蔵数を誇る。

■ 国立西洋美術館——フランス政府から寄贈返還された松方コレクション（実業家松方幸次郎(1865-1950)が1910年代後半から1920年代前半にかけて収集した印象派の絵画およびロダンの彫刻を中心とするフランス美術コレクション）をもとに1959年に設立された、西洋美術を専門とする日本で唯一の国立美術館。本館（ル・コルビュジェ設計、1959年）、新館（1979年）において、松方コレクションの作品および開館以来収集を進めているルネサンス以降20世紀初頭までの作品を常設展示。企画館（1997年）では、年3本程度の特別展を開催。寄託作品2点を含むモネの絵画15点、デッサン2点を収蔵。

みどころ

印象派を代表する風景画家モネ。その眼は風景をどのように捉え、カンヴァスの上にはどのような絵画空間が生まれていったのか。そしてその長い画業のなかで、彼の眼はどのように深化したのか。モネの「眼」の軌跡をたどります。

1. 国立美術館と私立美術館が共同で企画した画期的な展覧会であること。

本展覧会は、国立美術館である国立西洋美術館と、私立美術館のポーラ美術館の共同企画です。コレクションを紹介する展覧会を開催してきたポーラ美術館では、約50点の絵画作品を借用する展覧会は開館以来初のことであり、国立西洋美術館でも国内の私立美術館との共同による企画展は初の試みです。数年前からお互いの収蔵作品の調査を行い、意見交換を重ねながら、モネの眼の軌跡をたどる展覧会構成の検討と作品選定を行いました。

2. 日本の二大モネコレクションの夢の共演。

両館が誇る印象派のコレクションのいずれにおいても、モネは中核をなしています。国立西洋美術館では、モネと親交のあった松方幸次郎が画家のアトリエで直接、譲り受けた《睡蓮》(1916年)をはじめとする作品群が収蔵されています。ポーラ美術館では、1870年代初頭の若き日の作品から1908年の晩年の作品にいたるコレクションにより、モネの画業をたどる内容となっています。両館のモネ作品に加え、同時代の風景画もあわせて展示することで、モネの画業がよりわかりやすくなることでしょう。

3. 並べて見たかった作品を同時に展示。

両館のコレクションには、共通したテーマを扱っている作品や、制作に関して影響関係が指摘されている作品が含まれています。今回、いままで一緒に見たかった作品を並べて展示することにより、「夢の共演」が実現します。たとえば…。

1) モネ《グランド＝ジャット島》とセザンヌ《ポントワーズの橋と堰》①②

セーヌ河に浮かぶ行楽地を描いたモネの《グランド＝ジャット島》と、パリ北西の古都を描いたセザンヌの《ポントワーズの橋と堰》。ともに、画面の端に木々を配し、遠方へと蛇行する道で奥行感を演出する伝統的な構図を利用しつつ、遠景に近代化を象徴する工場や鉄道橋などを配した水辺の眺めですが、2人の芸術の相違も際立ちます。自然の息吹を伝えつつ、構築的で安定した空間が顕著なセザンヌ作品に対して、モネは、明朗な色彩と素早い筆致、そして斜角を強調した空間構成によって、画を一瞬の川風が吹き抜けていくような動きのある風景を描き出しています。

2) モネ《ジヴェルニーの積みわら》と《積みわら》③④

モネは1890年代から、同主題をさまざまな天候や時間によって描き分け、複数の作品を一度に展示する連作を発表し始めます。「積みわら」は1892年に初めて発表された連作です。《ジヴェルニーの積みわら》はその以前の1884年に制作された作品であり、《積みわら》は、1890年代の連作の積みわらの習作であると考えられます。前者は陽光に照らされた積みわらを明るい色彩で描き、後者では積みわらを包み込むもの、すなわち光や大気など不可視なものを表現しようとしていることが、積みわらを囲む切れ切れの線からうかがわれます。